慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヨーロッパ中世から近世における知の所有と共有について : 薬草事典を例に
Sub Title	
Author	池田, 真弓(Ikeda, Mayumi)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.12, No.1 (2025. 3) ,p.18- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム : DMCシンポジウム2024記録 「知と情報と人間 : デジタル知の深化と共有に向けて」 開催日時 : 2025年3月17日 (月) 14:00 ~ 17:00 開催場所 : 慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース 講演3
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000012-0018

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

講演 3

ヨーロッパ中世から近世における
知の所有と共有について―薬草事典を例に

池田 真弓
（慶應義塾大学理工学部外国語・総合教育教室准教授、DMC 研究センター所員）

ありがとうございます。ご紹介にあずかりました池田でございます。先程も木村先生と橋詰先生から図書館情報学の分野からお話しいただきましたが、私のお話は、がらっと変わります。500 年以上時代を遡りまして、さらに視覚情報と言いますか、そういったところからちょっと歴史的な視点をご提供できればと思っております。

それでは始めさせていただきます。こちら、今回、「ヨーロッパ中世から近世における知の所有と共有について―薬草事典を例に」というタイトルにしたんですけれども、実はここに本当は「挿絵入り」という文言を入れたかったんです。でも、あまりにもタイトルが長くなりすぎちゃうからこれはやめておこうと思いましたけれども、挿絵入りの薬草事典を中心にお話ししたいと思います。

なぜ「挿絵入り」と入れたかったか。私の専門に関わってきます。専門はもともと美術史です。それに書物史や書誌学の勉強もしまして、現在はグーテンベルク聖書などの 15 世紀後半にヨーロッパで印刷された、主にドイツで印刷された本の彩飾や挿絵の研究をしております。

今回なぜ挿絵入り薬草事典かと言いますと、本業の研究からのスピンオフなんですね。ですので、薬草事典の専門家ではありません。そこのところをちょっとご了承いただければと思います。今回の発表では、中世から近世にかけての薬草事典の挿絵がどのような情報を提供してきたのか、その変遷を見ていきたいと思います。

まず、ヨーロッパ中世における薬草事典の位置づけを簡単にご紹介できればと思います。そもそも薬草事典、全ての人々にとって有用な情報の宝庫のはずですよね。健康と医療に関わる情報を採録しておりますので、富める者も貧しい者もすべての人に関わってくる大事な情報です。

そしてですね、こちら中世における「世界の知」の結集でした。どういうことかと言いますと、古代ギリシア・ローマ時代からの薬草事典の内容、それから中世のアラビア医学の翻訳なんかも中世ヨーロッパには入ってきましたので、それらの知を総合して編纂した賜物だったんですね。

ヨーロッパ中世の人々にとって、古代ギリシア・ローマ、アラビア、そういった知は本当に世界の知を象徴しておりました。一方で、限られた人のみがアクセス可能な情報でもありました。中世の薬草事典、基本的には

ラテン語で書かれていました。ラテン語は学のある人々の共通語でありましたので、そもそもラテン語を勉強していないとこの本は読むことができない。

一方で、ラテン語で書かれていたということのメリットは、ヨーロッパの国をまたいで学のある人々であれば共通して読むことができた。つまり、イタリアで書かれた薬草事典がフランス人でもドイツ人でもラテン語を勉強していれば読むことができた、という意味では Universal Language だったんですね、ラテン語は。

そしてこの薬草事典の所有者や使用者はその時代の知の拠点だったんですね。こちら本当に大雑把に乱暴にくくりますと、7 世紀頃から 11 世紀頃まで、中世ヨーロッパでは修道院が知の拠点でした。本当にヨーロッパの津々浦々に修道院がありまして、そこには図書室もありました。大きい修道院なんかですと写字室といって、本を作成する部門もあったりしましたので、知を蓄積し、そして教育もしていた。12 世紀以降、もちろん修道院はその後も知の拠点であり続けたんですけども、12 世紀頃に大学が設立されますと、新たに大学という場が知の拠点になった。そういったところで薬草事典というのは使われていたんですね。

では、今回私が追加した「挿絵入り」ということで、薬草事典の挿絵のあるべき姿とはというのを少し考えていただきたいんですけれども、こちら私もとても好きな現代の日本を代表する薬草事典ですね。『原色牧野和漢薬草大図鑑』。こんな挿絵が入っていますが、薬草事典であれば、こういった挿絵が入っているのは当然だろうと思われる方、特に疑問をもたれない方も多いかと思います。

こちらの初版の刊行趣旨、これ私とても好きな文言なんですけれども、こんなふうに書かれています。「生薬原料となる植物を精密な原色図版により再現。多くの研究者・愛好者の方々に“薬”としての植物をより深く理解していただく」。こちらの「精密な原色図版」、私が勝手に強調したんですけれども、なぜこれが重要なんでしょうかね。

現在の私たちにとってみると、当然それはそうだよねと思うかもしれませんが、中世の人の立場に立ってみると、ちょっとそれはびっくりなんです。なぜかというと、ヨーロッパ中世の薬草事典では、基本的には挿絵がありませんでした。専門家向けですとか、大学の教科書といったものでは挿絵がないのが一般的だったんですね。

どうして挿絵がないのか。それは中世の人々もよく知っていた、古代ローマの博物学者、大プリニウスの見解を見ていくと理解できます。こんなことが書いてあります。「絵というものは、色彩が非常に多いときには、特にその目的が自然を写すことにある場合に

は、誤りを犯すばかりでなく、その他に謄写する人々の正確さにも何重もの危険があり、それから多くの不完全さが生ずるものだ」、つまり、挿絵は信用できないと考えられていたんですね。

ただ、挿絵がある場合もありました。そうしないと私の研究が進みませんね。こんな挿絵が入っている場合もありましたが、多くの場合は挿絵が非写実的だったんですね。この写実という言葉、非常に実は難しくて、もしかしたら荒金先生からいろいろ突っ込みがあるかもしれませんけれども、ここでは種の同定ができる程度に、その種の特徴を捉えて描いているか、ということを意味しているとご理解ください。

じゃあ、薬草事典で挿絵があって、でも非写実的、なにを描いてるかわからない。何のために入っていたんでしょうか。いろいろな役割がありましたが、少しだけご紹介します。

例えば、テキストの構造の視覚化ですね。どういうことか。だいたいテキストの区切りに絵が入るということが多かった。だから例えば、こちら絵が出てきたな、これ新しい章だな、こちら第 24 章のカミツレ/ローマカミツレの章ですね。右側は、次、新しい章、第 25 章だ、ウォールジャーマンダーが描いてあるんだ、というふうに挿絵が入っていることで、テキストの区切りがわかるというふうになっていた。

あと、もう一つの役割として、テキストの記憶や理解の促進というものがありました。こちらマンドラゴラという根っこを使う薬草なんですが、結構これインパクトのある挿絵ですね。人間の形をした根っこだというふうに言われていて、なのでちょっとなかなか面白い人間のような根っこのような挿絵が描かれています。インパクトのある挿絵、非常に面白いもの、奇妙なもの、珍しい絵というのは記憶に残るよというのが古代中世で続いていた中世の記憶術のテクニックの一つだったんですね。ですから、薬草事典のようなものは、ある部分なんかは特に記憶・暗記しなくてはいけませんので、こういったインパクトのある挿絵を入れることで暗記を促したと考えることができます。

さて、そんな薬草事典ですけれども、変革が起こりました。こちら 13 世紀末から 14 世紀初頭にイタリアのサレルノというところで作られた薬草事典ですが、左の絵がクロタネソウという薬草です。

実際のクロタネソウの写真と比べてみても、本物を見て写したのかなと思うほど、それこそ非常に精密に描かれています。挿絵を見ただけでクロタネソウだって分かりそうなくらいリアルに描かれていますね。こんな挿絵が生まれたというのは、中世の薬草の事典を研究している人間にとっては本当にびっく

りなんですが、どういったコンテキストでこれが作られたか、本書は大学関係者－当時サレルノには大学がありましたので、そこの医学部の教授か誰か－が実際に植物を観察して描いたのではないかというふうに推測されています。そうすると、なるほど納得、それはその通りだなと思いそうなのですが、実はこれもかなり驚くべきことなんですね。

なぜかというと、当時一般的に大学では医学部なんかもそうなんですけれども、座学が中心でした。実際に植物を見て云々ではなくて、もう教科書を読んで暗記して、その内容を議論してということで、薬草園に行って、植物を見て、絵を描いて、なんていうことはちょっと考えられなかったんですね。ではなんでこんな薬草事典が作られたのか。

私自身はサレルノという地、場所が関係しているのかなと思っています。というのは、サレルノは 10 世紀頃から本当にもうヨーロッパ中に知れ渡るほど実践的医療の場として非常に有名でして、大学が設立した後も多少は実践的な医療が続いていたのではないかと思います。

実際にこの写本が制作された少し後には、サレルノで薬草園が作られて、大学医学部の教授が[薬草園の]面倒を見ていたなんていう話もありますので、サレルノでは、実物の薬草を見て使用するという伝統が根付いていたのではないかなというふうに考えています。

とすると、この挿絵に実物同定という実用を見出した、これはとても早熟な例ではないかなと思います。実際にこの絵を見ることで、クロタネソウだと分かる。そういった挿絵事典はなかなかこの時代、他にはなかったので、本当に例外的でした。

もう一つ、例外的な非常に素晴らしい挿絵入りの薬草事典をご紹介します。

ちょうど今ご紹介した薬草論から 100 年後くらいに、同じくイタリア、もう少し北のパドヴァというところで作られたカッラーラ本草書という挿絵入り薬草事典です。こちらはですね、注文主がパドヴァ領主のカッラーラ家フランチェスコ 2 世ということで、貴族であり医療従事者ではなかったんですね。

さらに面白いことに、執筆で使われた言語がラテン語ではなくパドヴァの方言でした。つまり、ラテン語を勉強していない人でも読むことができた。つまり、専門家・プロフェッショナルでなくても使用することができたという写本なんですね。そしてとても興味深いのが、確かに写実性という点でも優れていますが、先程の薬草論と比べても芸術性が際立っている。

先程は大学関係者が挿絵を描いたのではないかという推測があったんですが、これは明らかにプロの画家が描いていると考えられます。本当に写実的であるだけでなくて、芸術的でもある。こんな本当にモダンなレイアウトの挿絵もあったりして、それこそ額に入

れて飾りたいと思うくらいとても美しいんですが、なぜこんな斬新な作品が生まれたのか。

先ほど貴族が注文したと言いましたが、非専門家でアマチュアで、しかも権力者だった。なので自分のやりたいように作ってもらえた。いわゆる治外法権の世界で斬新な作品が生まれた。そして挿絵そのものを楽しむ。勉強のためとか、世のためというよりは結構挿絵を見るというところに重きが置かれた作品ではないかなというふうに考えております。そういったところから、挿絵の役割というものの変化というのが見て取れるかと思います。

続いて、またちょっと 50 年ほど時代が下りますけれども、ヨーロッパで活版印刷術が導入されました。じゃ、そこで薬草事典に変化はあったのかどうかということですね。これもまたちょっと時代が 30 年くらい下ってしまうんですが、こちらをご紹介していきたいと思います。『健康の庭』という題名の薬草事典でして、こちらも面白いことに医療従事者ではなく、マインツの貴族ベルンハルト・フォン・ブライデンバッハという人物が出版を企画しました。テキストはラテン語ではなくドイツ語です。つまり、非専門家、アマチュアがこの薬草事典を作らせたということなんですね。

さらにですね、全部で木版挿絵が 381 枚。これすごい数なんです。これの 1 年前にも同じところ、マインツで薬草事典が出版されてるんですが 150 枚程度なんですね、木版挿絵が。だから倍以上の、もう挿絵大増量ということで、非常に挿絵重視だということがわかります。

そしてですね、企画者による序文もまたとても面白いんですが、この企画者は先程申し上げたマインツの貴族ですね。「正しい色と形」というフレーズが何回か出てくるんですね。こんな具合で出てきます。「神が無力な人間のために創造した種々の薬草の効能を正しい色と形で表した本を編纂」したい云々と。「ドイツの地に生えていない薬草については、正しい色と形で描写できなかった」、「有能な画家を巡礼の旅に同行させて正しい色と形で描写させた」。

[「正しい色と形」というフレーズは]何回も、もっと他にも出てくるんですけども、どうも挿絵の見た目の正しさをアピールしているようなんですね。つまり、正しい色と形の挿絵に価値があるとの認識が見てとれます。

これちょっと皆さん思い出してください。ちょっと似ていませんか？ 精密な原色図版により再現云々。『原色牧野和漢薬草大図鑑』の初版の刊行趣旨です。これ、正しい色と形ということもできますよね。ですから、この 1485 年に出版された薬草事典、だんだん私たちの時代とその挿絵に対する認識が近づいてきたのかなという印象を私は持っています。

この『健康の庭』の人気は本当にすさまじいものがありまして、出版直後からあちこ

ちで海賊版が出ました。一番左が本家、もう数カ月後にはですね、アウクスブルクでヨハン・シェーンベルガーという人物が何版か海賊版を出しています。こちらウルムでも２年後ですかね、ちょっとレイアウトが変わっていますが、やはり海賊版が出ています。

他にもいくつも出ているんですが、ご紹介しきれないのでこれくらいなんですが、つまり、薬草事典がそれまでの限られた読者層から開かれた読者層へ移っていった。それをこう活版印刷術というものが促したのではないかな、と一つ言えるかと思います。

最後にまとめになりますけれども、薬草事典の挿絵が提供する価値－あるいは情報と呼んでもいいかもしれません－[についての]まとめです。まず１つ目にご紹介したのが、不要だ、危険だという認識ですね。不要、危険な情報だから排除しよう。あるいは[2 つ目としては]挿絵が存在しているということそのものに価値があった。そこにあるから便利。テキストの区切りになるとか、記憶に残るといった情報といいますか。3 つ目は、挿絵がどう描かれているか。ここでは写実的に描かれているという点に実用的な価値が見出された。あ、クロタネソウだな、これ植物園で見たな、と同定することが可能。そしてもう一つ、挿絵の持つ感性的あるいは美的な要素に価値が見出された。挿絵そのものを見るとか、あるいは人に見せて喜ぶということがなされた。

そして、活版印刷術が導入されることで、専門家や非専門家を問わない読者層の広がりが見られる。そしてもちろん、原理的にはですけれども、購買力さえあれば誰でも手に入れることができた。つまり、知の寡占、大学人などの知識層や貴族などの権力者層からの解放、[これによって]知の民主化へ進んでいったのかどうか？ ここはあえてクエスチョンマークにしておきましたが、そういったことについても後ほど議論できればなと思います。

少々まとまりのないお話になりましたが、私の発表は以上とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。